

亜細亜大学課程教育研究紀要

第9号 2021

【研究ノート】

米国ケンタッキー州立大学 (KSU) とのプロジェクト

-ICT を活用した海外との遠隔授業実践・・・千波 玲子……………1

【履修生体験記録】

図書館総合演習(1)・・・永井 若菜 (法学部) ……………4

図書館総合演習(2)・・・田代 樹洋 (経済学部) ……………5

介護等体験(1)・・・菅原 祐輝 (経営学部) ……………6

介護等体験(2)・・・河野 楓 (経済学部) ……………8

介護等体験(3)・・・小林 愛里 (国際関係学部) ……………10

教育実習(1)中学社会・・・山口 莉央 (国際関係学部) ……………12

教育実習(2)高校公民・・・吉永 帆乃未 (法学部) ……………14

教育実習(3)高校商業・・・望月 大叶 (経営学部) ……………15

教育実習(4)高校英語・・・栗山 泰征 (国際関係学部) ……………17

教育実習(5)中学社会・・・町田 なの穂 (法学部) ……………19

【課程基礎データ及び資料】

2020 年度 課程履修者数 ……………21

2020 年度 資格取得者数 (教員免許、司書、社会教育主事) ……………22

2020 年度 介護等体験活動実施状況 ……………22

2020 年度 教育実習先・実習科目一覧 ……………23

2020 年度及び過年度 卒業生進路一覧 ……………24

2020 年度 課程科目担当者一覧 ……………25

課程運営協議会記録……………27

【規程類】

亜細亜大学課程教育研究紀要刊行規程及び投稿規程……………29

<研究ノート>
米国ケント州立大学 (KSU) とのプロジェクト
-ICT を活用した海外との遠隔授業実践-

千波玲子

ICT を活用した海外との遠隔授業を計画・実施する参考となる経験を提供するために、国際関係学部英語科免許課程の学生を対象に米国オハイオ州ケント州立大学教員の協力のもと、2021年10月から11月にかけて5回のオンラインでの共同授業を実施した。

1. 期間：10月26日（火）～ 11月30日（火）計5回 午後10時～11時（日本時間）
2. 協力大学：米国オハイオ州ケント州立大学（KSU: Kent State University）
3. 協力教員：サラ・リリング教授
4. 内容：Zoomを用いた日米間での共同授業

1) 参加者及び該当科目：

* 亜細亜大学「英語科教育法Ⅳ」受講生12名

* ケント州立大学大学院「Practicum in Teaching International Students」受講生5名

2) 概要：

ケント州立大学の大学院生1名と亜大生2名あるいは3名で5グループを構成し、亜大生が選択したトピックについてのリサーチおよびインタビューを実施し、その結果に基づいてグループプレゼンテーションを行った。KSU生の役割はmentorおよびintervieweeであり、各グループでのリサーチに関する協力・指導を行った。

5. 実施内容

1) 日時

第1回：10月26日	自己紹介、グループ編成
第2回：11月9日	リサーチ内容提示、インタビュー内容検討
第3回：11月16日	プレゼンテーション構成検討
第4回：11月23日	インタビュー実施
第5回：11月30日	グループプレゼンテーション実施

2) トピックおよびグループ構成

トピックの選定は日本人教員からいくつか候補を提示した。その基準は中学校・高等学校の教員となった際に生徒に「英語を使って社会的な問題について学び議論する」ために有益な内容ということとした。CLIL(Content and Language Integrated Learning)を取り入れたのは英語での調査や発表をする機会が今後は増えていくと考えられ、学生自身がその過程も含めて経験することは教育法の一環としても重要だと判断したからである。グループ編成を行う際には日本人学生にトピックについての希望を出させたのち、人数調整およびアメリカ側の国籍および性別を考慮して5つのグループメンバーを決定した。

<トピック・グループ構成>

A:school uniform (国際関係学科 3年2名、多文化学科 3年1名、インドネシア人男性)

B:gender quota (国際関係学科 3年2名、アメリカ人女性)

C:college education and cost (国際関係学科 4年1名、3年1名、アメリカ人男性)

D:euthanasia (国際関係学科 3年3名、ロシア人女性)

E:marriage (国際関係学科 3年1名、多文化 4年1名、サウジアラビア人男性)

<実施詳細>

第1回：Zoomでの自己紹介と質疑応答を行った。KSU側の大学院生の中には留学生で英語教育の経験もある人も含まれていたため、自信の英語習得や英語教育経験などについても話してもらった。インドネシア人学生は英語教育の経験者であり、多言語社会での言語習得の状況についての情報も提供してくれた。サウジアラビア人学生の英語アクセントがこの段階では亜大先生に多少難しかったようである。ロシア人の学生の英語については特に問題はなかった。なお大学院生の中に日本人を教えた経験のある学生はいなかった。

第2回：第1回のセッション後、亜側の大学祭2週間の間に、亜大生にはそれぞれのトピックについてのリサーチを行いインタビュー内容の原案を作成してもらった。グループメンバーで情報収集を分担し発表内容の構成についても検討を進めた。KSUの学生は亜大生が提示した内容を検討・分析しアドバイスや追加情報の提供などを行った。トピックによってはKSU学生にとってなじみのないものもあり、彼ら自身が学ぶことも多かったというコメントがあった。

第3回：亜大生が原案を作成したプレゼンテーション用のファイル内容に関してグループで確認を行った。その際KSU側から示された評価基準 (Content / Audience Involvement / Interaction with Audience Questions / Clarity / Fluency / Language Accuracy / Group Participation) を参考にした。亜大生は他の英語科目でのプレゼンテーションの経験もあり基本的構成や参考資料の提示方法などについてはどのグループも問題はあまりなかった。あらかじめ評価基準を亜大生に知らせていたので、それを参考にインタビューの質問内容やファイルや発表原稿の作成を行ったようである。

第4回：それぞれのグループが作成した質問に基づいてインタビューを5名のKSU生に対して行った。KSU生が各グループのブレイクアウトルームを訪問する形でインタビューを実施し、亜大生にとってはmentor以外の大学院生とコミュニケーションをとる機会ともなった。はじめて話す相手もいる状況であったが、学生達は4回目のセッションということで、問題なくインタビューを実施出来たようである。文章での回答ではなく可能な限り口頭で情報を得るように指導していたが、補完的にメールでのやりとりも行ったようである。

第5回：各グループが画面共有を利用し発表を行い、その後質疑応答を行った。英文の正確さや発音などは多少差が見られたが、内容については情報量や視点などもよく考えられていたので、グループプレゼンテーションとしてはどれも優れたものであった。まとめとして最終的なコメント交換をし、感想なども述べ合い交流を図った。

<評価>

亜大生の評価はセッションへの参加およびプレゼンテーションの実施をもって成績の 10%とした。KSU 側はリリング教授の裁量に任せる形とした。

6. 総括

- * 今回の共同授業は、コロナ禍の影響で派遣留学も実施されず対面での授業も難しい状況で、多少でも英語科免許課程の学生に実際に英語でのコミュニケーションの機会を提供したいと考えで企画した。
- * KSU 側の大学院生が「英語教授法」専攻ということで、亜大生に対して協力・指導に適していると判断しリリング教授に協力依頼をした。
- * リサーチのトピックによっては、宗教的政治的な側面も含まれるためグループを編成する際にリリング教授のアドバイスを受け、イスラム教徒 2 名（インドネシア、サウジアラビア）の学生を **gender quota** および **euthanasia** の担当にはならないように工夫した。ただしインタビューには答えてもらう形であったが特に問題が生じることはなかった。
- * アメリカとの時差のためにセッションが午後 10 時開始であったが、受講生は欠席もなく熱心に取り組んでいた。亜大から支給された Zoom アカウントを利用し安定した接続状況ですべてのセッションを終えることができた。
- * リリング教授の感想：「日本人学生は熱心で大学院生たちも共同でのプロジェクトがやりやすかった」「同じ学期にドイツとのプロジェクトも実施したさいには、その際には学生の態度などに問題もあり当初は多少懸念があったが、それも日本人学生に関しては杞憂に終わった」
- * 学生からの感想：
「最初はノンネイティブの英語に戸惑ったところもあったが、セッションを繰り返すごとにお互いについて知ることにも出来、楽しくコミュニケーションが取れ多くのことを学ぶことができた。」
「オンラインのセッションのみでは不足した意見や情報の交換はメールでのやりとりでプレゼンテーションに備えるなどライティングも使った。」「夜のセッションのためアルバイトなどと重なったが Zoom での実施だったので参加することができた。」

7. 今後への展望

オンラインを利用した海外との共同授業は今後、中学校・高等学校でも実施されていくであろう。ICT の利用に抵抗感の少ない中高生がオンラインを用いて英語で海外の生徒とコミュニケーションを図る機会が将来さらに増えることを想定すると、教職課程にいる大学生が自らそのような体験をしておくことはとても重要であると考えた。アメリカの場合、時差が問題となるが、日本時間の午後 10 時というのは日本人学生の生活習慣の中で不可能な時間帯ではない。実施内容に関しては相手側の教授との連携、学生の専攻などを考慮して十分な事前の準備が必要である。今回は個人的に親しいアメリカ人教授に協力を依頼する形で実現したが、大学間で何らかの協定を結びカリキュラムの中に取り入れることが出来ればより望ましい形へ発展させ、多様な機会を提供することが出来るものとする。

私は、図書館総合演習で学んだこと、国分寺紀伊国屋書店で開催された書架作りをしたこと、書架作りを終えて学んだことを書きたいと思います。

1つ目は、コミュニケーションの大切さです。この授業は全てオンラインで開講されたため、zoomを使って講義が進められていました。大学のほとんどの授業が先生が話し、生徒はそれを聞いて理解を深めるといった一方通行の授業ですが、この授業は違いました。毎授業ごとにzoomでブレイクアウトルームが作成され、学生同士で話し合うことができ、わからない部分があればすぐに先生に聞くこともできていたため、他の授業に比べ理解しやすい授業であったと感じます。また、先ほど述べた学生同士での話し合いの際に必要なってくるのが、「コミュニケーション」だと考えます。対面で行われれば、顔を見て表情を伺いながら話すこともできましたが、オンラインということで、誰が話し始めるのだろう、限られた時間の中でどれくらい話し合いができるのだろうかと少し不安になりました。私はなるべく自分から声を出すように心がけていましたがやはり難しいな、と思うところがありました。そして今後もこのような授業スタイルがあると思いますが、先生や学生同士がコミュニケーションを取りやすいものになって行くと良いなと思います。

2つ目は、国分寺紀伊国屋書店で開催された書架作りに向けて、ほんの選書やPOPの作成をした時のことです。私は、この書架作りをすると聞いて「各々が決められた紙やペンを用意しやる」というように考えておりました。しかし、大学図書館員の方の行き届いたサポートにより、POP作成期間に入る前までに自宅に作成キットが届き、自宅にいらながらも大学にいる時と変わらないものが受けられ、サポートの手厚さに感激しました。過去に行われたイベント時に作成されたPOPを参考に自分らしいPOPの作成ができました。

3つ目は、書架作りを終えて学んだことです。今回の書架作りのテーマは「お家時間を

虹色に」ということで自粛期間が開けた後にしたいことや、気分が晴れやかになるような本、何か考え直したり出来る本、を各々が選んだ本をPOPをつけて書架作りをしました。書店の方から「以前は動きのなかった本がPOPがついたことにより驚くほど動いて売り上げに繋がった」というお話を先生を通して聞いたときは、POP作成や選書ができて良かったな、色々考えた結果が売り上げにつながり良かったなと思いました。

今回、図書館総合演習の講義を受け「図書館」「書店」で何気なく目にしていたものを改めて仕組みが分かった上で見るのでは、本の見方が以前とは変化したなど自分でも感じるほど内容の濃いことをさせて頂いたなと思いました。

最後に、「図書館総合演習」の講義に携わって下さいました、安形先生、図書館員の熊谷さん、斎藤さん、国分寺紀伊国屋書店の方々、全ての方に感謝申し上げます。

私は、図書館総合演習で、三つのことについて学びました。

まず一つ目に、挑戦することの大切さです。私は、今まで企画や、アイデアを考えることはあまり得意ではなく、また、あまり挑戦することはありませんでした。従って、図書館演習で、紀伊国屋さんでポップを飾ると言われた際には、絶望していました。しかし、熊谷さんの説明の中の、「このくらいいいんです。」という言葉と、初心者向けのポップの作り方の説明を聞いて、どうにか挑戦してみようと思うことが出来ました。前向きにポップ作りに取り組み始めたはいいものの、最初のうちは、何もアイデアが思い浮かびませんでした。しかし、いくつもいくつも、アイデアを紙に書き、まとめ上げ何とかポップを完成させることが出来ました。他の方々と比べると、無難なポップになってしまいましたが、完成した際にはとてもうれしかったです。また自分が挑戦し、努力した結果のものが、実際に紀伊国屋さんの店舗に展示され、様々なお客様の興味を引くことが出来たという事実を聞き、諦めて手を抜くのではなく、全力を尽くしてよかったと思いました。

二つ目に、コミュニケーション能力です。私は、人と話すことがあまり得意ではありません。しかし、この授業では、様々な場面で、人と話すことがありました。初めのうちは、オンライン授業で、顔を合わせて話すわけでもないのに、黙ってブレイクアートルームの時間が終わるまでいようと考えていました。しかし、そのように考えていると、話を振られてしまいました。私は慌ててマイクをつけ、自分自身の意見を言いました。意見を言い終わりマイクを切った後、ふと考え直してみると、案外普通に話すことが出来ていたのです。私は、この授業を受講しなければ、自分が普通に他人と意見を交換できることに気が付かなかったと思います。

最後に、ここまでの経験から、自分に自信がついたのではないかと思います。なぜな

ら、この授業は、4月の私には辛いことばかりだからです。初対面の人と話し、意見を交換する。新しいものを一から考えるなど、私の苦手なことだらけの授業でした。私は前の段落でも書きましたが、自分がコミュニケーションをとることが出来ると気が付くことが出来ました。そして、このことに気が付いた私は、ある挑戦をしました。それはブレイクアートルームで司会をすることです。オンラインで顔も見えない中で、他人とコミュニケーションをとることはとても大変でした。また、ルーム内で話題が途切れてしまい、静かになってしまうときもありました。しかし、そのようなときに、話題を提供し、出来る限り他の方々がコミュニケーションを取ることが出来るよう勤めました。また、議論の内容が更に充実するように自分から意見を出し、話を広げられるように努力しました。このような挑戦をした結果、周りの方々が満足したのかどうかは分かりませんが、自分自身のこの授業と、自分の行動に満足することが出来ました。

最後になりますが、この授業で、様々な成長の機会を与えてくださった先生、職員の方々、本当にありがとうございました。

介護等体験活動を終えて

経営学部 経営学科 2117300 菅原祐輝

私は、八王子実習所(以下、実習所)で5日間実習を行った。

私の実習施設のイメージは、利用者が余生を楽しく過ごすための施設だった。具体的にいうと、認知症などの症状を持った方が、スタッフとコミュニケーションをとって、笑っている姿を思い浮かべていた。

実際に実習施設は、スタッフが細心の注意を常にはらいながら、利用者のメンタルサポートを行っていた。ここでいうメンタルサポートというのは、利用者の少しの表情の変化を見逃さずに、褒めたり、話したりするなどコミュニケーションを図ることを指す。スタッフは食事介護をはじめとしてあらゆる補助をしなければならないので、同時にこのようにメンタルサポート行うのは、非常に難しい。ではどのようにこなしていたかということ、スタッフ同士が声を掛け合うのである。その場を離れるときには「〇〇(自分の名前)、席を外します」、飲み物を飲ませる際には「△△さんに今からお茶を飲ませます」など、どんな些細なことでも常にスタッフ同士で声を掛け合っていた。そして、それに対し必ずスタッフは反応し、感謝の言葉を付け加えていた。これには2つの意味があるように思えた。まず、トラブル防止である。常に声をかけていることで、例え間違った対応をしたとしたらその場で止めることができる。次にスタッフと利用者の居心地の良い雰囲気作りの意味合いがある。スタッフは声を掛け合う習慣があることで信頼関係が生まれ、利用者は自分が介護されている後ろめたさを感じにくい雰囲気が出来上がっているように感じた。このような環境の中で私は実習をしたが、最初は利用者が何を感じ、何を望んでいるのか理解できなかった。なぜなら、利用者は話すこともできず、目線があうこともしばしばであったため、コミュニケーションが取れている感覚がなかったからだ。ここでスタッフの方に次のようなアドバイスをいただいた。

「表情だけではわかりにくいことが多いです。スタッフも利用者との関わりの積み重ねから、わかってくるものがたくさんあります。積極的に利用者には話しかけて、新たな発見を増やしてみてください。」

そこで私は、話しかけるなどして多くの時間を共有することで、わかることが多いのではないかと思い実践することにした。実習4日目になると、なんとなくだが利用者の方が何を感じているのかがわかるようになってきた。名前を呼ぶと少し瞳孔が動いたり、嬉しかったりすると指が動いたり、怒ると何も反応がなかったりするなど様々な利用者の変化に気づくことができた。それでもスタッフの方の方がいち早く詳細に利用者の変化に気づ

くので、対応の早さという点では遠く及ばなかった。一緒に過ごしている時間がそもそも違うので、仕方がないことなのかもしれないが、それ以上に利用者への思いやりやスキルの差が大きく出ていると強く感じた。

私は介護等体験を通して、現場で働く人の重要さと、それを理解し伝えることの重要性を学ぶことができた。現場の人は、生きがいと自信を持って働いていた。そして利用者も現場の人の温かさを感じながら、楽しそうに生きていた。どれだけ医療技術が進歩しても、障がいを抱えて生きていく人は存在し、サポートしていく体制が必要である。しかし私のように、そのような体制があることを知っていながらも、中身を理解できていない人は大勢いるのであった、そこから偏見が生まれてしまうのかもしれないと思った。私が教師となったなら、学んだことを子供達に伝えて、そういった偏見をなくしていきたいと思う。

介護等体験活動を終えて

経済学部 経済学科 3118215 河野 楓

今回の介護等体験実習での社会福祉施設と特別支援学校の二つの実習を終えて、たくさんの学びや反省点がありましたが、やりがいを感じると共にとても良い経験をする事ができ、充実した介護等体験実習になりました。

まず初めに、社会福祉施設と特別支援学校の職員や教員の方の話で感じたことは、どちらの施設でも高齢者の方や児童にとって似た目標があることです。社会福祉施設では、日常生活の中で不自由に感じる課題を理解し、その解決を目指した自立を支援している点、特別支援学校では、障害や生徒一人ひとりを理解し、自己決定や自己選択といった課題について生徒の自立や成長の支援をしている点です。介護等体験での活動内容は主に生徒や高齢者の側について手伝いや会話することがメインでした。その中で実習中の失敗としては、特別支援学校では教室間の移動や授業中に無意識に手伝いすぎていることについて指摘を受けました。このような行動は、教員の方の真似や意見を聞くことで徐々に改善していき、自分のすべきことを考えて行動できるようになりました。その結果、「この子の着替えをお手伝いして」や「見ていて」といったように仕事を任せてもらえることも増えました。しかし、このように実習の中で改善していったことがあったものの、今回の反省点としては高齢者の方や児童に対してコミュニケーションの部分でもっとできる場所があったと感じます。私自身は、実習のはじめ頃は苦戦したものの上手くコミュニケーションが取れていると感じていましたが、振り返ってみると全員に同じ紋切り型のコミュニケーションの取り方をしていたことに気づきました。本来は実習の中で多様な人と関わりがあるはずなのに話しの流れが同じになってしまっていた場面が気になります。もっと高齢者の方や児童に寄り添って理解しようとする気持ちがあってもよかったのではないかと考えます。

一方で、私がしたことのないような経験をお持ちの高齢者の方のお話を聞くことはとても新鮮でした。考え方や価値観をより広げることができたと思いました。また、特別支援学校では、担当したクラスでは言葉のキャッチボールが上手くできない生徒が大半でしたが、その中で何を考えているのか、何を伝えたいと思っているのかを表情や仕草からも感じ取ることができるのだなと感じました。四年次の教育実習までには、このようなコミュニケーションの取り方を改善しようと考えていたのでした。

最後にこの介護等体験で得られたことはたくさんあり、個人を理解するためにも、ニーズに応じたコミュニケーションの重要性について特に学ぶことができました。話すことが好き、苦手、あるいは話すことが好きであっても初対面の人とは苦手といった様々な人がいて、そういった違いのある人たちとの交流を通じて学ぶことができました。社会福祉施設も特別支援学校も人と人の出会いや交流がある場所であり、それぞれに今までの生き方や価値

観の違いが生まれる個人の背景を理解していくこと、またその違いに対して誠実に向き合っていく姿勢がコミュニケーションの基本であり、そのことを実習を通して職員と教員の方々から学ぶことができました。

今回の介護等体験実習では、新型コロナウイルスの影響で時間の短縮などがありましたが、充実した時間を送ることができました。上記で述べたように、私が一人の人間としてまた、教員の立場に立った時に大切にしていきたいことを多く感じることもあり、改めて学ぶことが多い実習となりました。

介護等体験活動を終えて

国際関係学部 国際関係学科 6118065 小林愛里

社会福祉施設、特別支援学校ともに予想外の場面が多く、沢山苦労したが、全体を通してとても良い勉強になった。

私が最初に社会福祉施設を訪問した際、想像以上に現場が静か、というのが印象的であった。何も活動をしていない時間帯ではあったが、全体の雰囲気が重く感じ、「この中に入って邪魔だと思われまいだろうか」など、色々な事を考えてしまった。実際に会話をしていても、意思疎通ができていいのか心配になり、不安な気持ちからうまく話せなくなってしまった。自信の喪失からうまれた曖昧な言動や行動は、利用者の方にとっては不快であったかもしれない。そこで、この状況を改善すべく、私は職員の方の様子を注意深く見ることにした。職員の方は介護のプロであるのに対し、私は初心者で、しかも高齢者の方と接する機会が普段ないので、真似をするにも限界があるだろう、と感じていた。だが、職員の方のやっていることは良い意味でとてもシンプルで、難しい技術を使ってコミュニケーションを取っているようには見えなかった。そして職員の方でも、利用者の方に「何言ってるかわからない」などときつくと言われる場面があって驚いた。それでも職員の方はとても慣れている様子で、少し躓いても常に余裕があった。そこが私と違うと気づいた。私はたった一つの失敗を引きずり、正解ばかりを意識して行動できないでいたが、それが自信の喪失に繋がり、いつまでも思い切ることができないままであった。たった 5 日間の体験を無駄にしないよう、反省点を早めに解決させて、楽しむことに意識を向けようと努力した。また、利用者の方との会話や、その中でいただいた言葉を大切にしようと考えた。すると不安な気持ちは自然と軽減され、自信もついたように思えた。大きな声も徐々に出せるようになり、会話を楽しめるようになった。そして、利用者の方々もそんな私を快く受け入れてくださり、何より嬉しかった。

特別支援学校での体験も、なるべく楽しむことを心掛けた。だが、社会福祉施設の時とは別の難しさがあり、苦戦した。配属先は小学部 3 年生 6 人の学級で、最初はその少なさに驚いた。これに対し、担任、副担任の先生は多い時で 3 人、そこに私が加わるので、本当にこんなに先生が必要なのだろうか、と不思議に思ったが、実際に始まってみるとその理由はすぐにわかった。子どものタイプが一人ひとり全く異なり、それらを把握しきれてない段階で接するのは大変だった。何を始め出すかわからないし、一瞬でも目を離すとどこかへ行ってしまったり、危険な行動を取ることもあるので、子どもに対して先生が多い状況でも本当に暇がなかった。また、私が想像していた小学 3 年生とはかなり違い、更に幼く感じた。何度指示をしてもその通りに動けなかったり、急に止まったり、私に何を求めているのかわからなかったりで、「私には何も理解できない、どうしよう」と不安になった。だが、この流れが社会福祉施設での体験と同じだと気づいた。今回は更に短い 2 日間で、落ち込むば

かりでは勿体ないと感じたため、わからないことは先生方に対処法を聞き、先生方の指導の仕方をよく観察して、すぐに実践してみようと考えた。また、相手をしっかりと理解し、その上でコミュニケーションを楽しもうと決めた。伝えたいことははっきりと言葉にし、その子自身と向き合うことで、意思疎通が少しできるようになった。すると、自然と子どもたちの方から懐いてきてくれて、最終的には皆が受け入れてくれたような気がした。あまり話せなくても、行動で感情を示したり、積極的に一緒に遊んでくれて、会話以外のコミュニケーションもとても大事だと実感した。

二つの体験を通じ、技術を気にするよりも、相手をしっかりと理解してコミュニケーションを取ることが大切であり、誰かからもらった言葉や楽しかった経験をやりがいに繋げられることを学んだ。

教育実習を終えて

国際関係学部国際関係学科 4 年

山口 莉央（氏名）

1. 実習までの準備

「教育実習・亜細亜 10 項」に書かれているように、教育実習の始まる 1 ヶ月前に自習校へ御礼葉書を送り挨拶をし、教育実習開始の 1 週間前に事前打ち合わせを行った。実習期間中の注意点や日程などの確認をした後、学級の指導教諭の先生とは道徳の研究授業について、そして社会科の指導教諭とは実習で扱う分野と研究授業で何の授業をするかについて話し合いをして事前打合わせは終了した。

実習までの間、事前打ち合わせの際にもらった担当するクラスの生徒の顔写真付きの名簿を見て、顔と名前をできるだけ事前に覚えるようにした。事前に名前を覚えたことで、生徒との距離を縮めることができたので、写真付きの名簿は有効に活用することができた。また実習中に扱う社会科の内容について教科書や資料などをしっかり読み、調べるなど教材研究を行った。

2. 実習中の出来事

教育実習の初日は担当のクラスとの交流会を開いて頂いた。私に関してクイズ形式の問題を生徒に解いてもらったり、似顔絵選手権を開いたりなど生徒と距離を縮められる時間があり、この交流会を通じて生徒と親しくなるきっかけとなった。

教育実習 1 週目は主に社会科や道徳の授業を見学させて頂き、2 週目から授業をする際にどういった方法でどのように授業を展開していくかなどを学びながら自分が実際にやる授業を考えていった。

2 週目からは実際に授業を行った。生徒にどうしたら興味を持ってもらうかを考え、なるべく写真などの資料を活用したり、1 度の授業で 1 回はグループワークや話し合いを取り入れたりするなど、生徒一人ひとりが授業に参加できるように工夫した。また 2 週目で道徳の研究授業があり、扱う教材の範読の練習や発問の検討、生徒から出る

意見を予想して板書練習をするなど研究授業の準備を並行して行った。教育実習期間中に体育祭が行われた。体育祭は生徒と沢山コミュニケーションを取って、仲を深められる大切な場であった。教育実習中に体育祭などの行事がある場合は、ぜひ積極的にコミュニケーションを図って、生徒と関係を構築して行ってほしい。

3 週目には社会科の研究授業を行った。社会科の研究授業では 3 大宗教について知識構成型ジグソー法を用いて行い、生徒主体の授業を行った。研究授業では内容を詰め込みすぎてしまい、生徒の理解を深めることが難しくなってしまった。生徒の理解に合わせ柔軟に授業を展開していくことの重要性を改めて実感した。

3. 実習を通して学んだこと

授業を行う際しっかり教材研究を行い、授業をしたつもりだったが、実際には教材研究が足りず押えるポイントを理解していないまま授業をしてしまったことがあった。押えるポイントはしっかりと押えたうえで生徒に興味関心を持ってもらうような働きかけ、生徒と生徒、生徒と教師が学び合える環境を作ることの難さと大切さを痛感した。

大学で学んでいる時には分からなかったが、実際に教壇に立ったことで指示を出す難しさを実感した。自分ではしっかり指示を出したつもりが生徒には伝わっていないことが多くあった。「ダラダラと長く説明すると生徒は混乱してしまい何をしたら良いか分からなくなってしまう。指示は簡潔かつ明確に出すことが大切」と指導教諭からご指導いただいた。簡潔に伝えることを意識すると生徒に指示が通るようになった。授業の際の話し方や説明の仕方も大切だが、指示が通らないと授業が進まないため、生徒に伝わる指示の出し方を考えながら話すことが求められると感じた。

また、教育実習を通じて最も感じたことは学級経営の大切さだ。同じ授業を行っても、クラスや

学年によって全く授業の雰囲気や展開が違っていた。どのように、どれくらいの距離感で生徒と関わるのかなど ST 一つをとっても学級経営が授業に与える影響はとても大きいと感じた。

4. 後輩へ伝えたいこと

普段の生徒との関わりが授業でどれだけ生徒が発言してくれるか、活発な授業になるかなど授業に大きく影響する。そして授業中に生徒が助けてくれることも多い。休み時間や放課後など時間があるときは積極的に生徒とコミュニケーションを取って欲しい。

実習の最終日に生徒から花束と一人ひとりが書いたメッセージカードを頂いた。実習前は不安や心配なことばかりだと思うが、授業一つひとつをやり遂げた時、そして実習をやり遂げた時の達成感や喜びはとても大きい。実習の終わりに「先生に担任になって欲しい」「先生の授業分かりやすかった」など生徒から嬉しい言葉をもらうことができ、心から嬉しかった。教育実習は一生に一度の経験であり、その経験は人生にとってかけがえのない思い出になる。実習校の先生方から多くの助言を頂きながら、生徒とコミュニケーションを取り有意義な教育実習にして欲しい。

授業の本質を知れた教育実習

法学部法律学科 4 年

吉永 帆乃未

1. 実習までの準備

教育実習をするためには、実習先からの許可が必要です。その許可を得るためには、大学3年生の春ごろから実習校に連絡を取る必要があります。実習はこの許可を得るところから始まっているという気持ちで、実習先に失礼がないように心がけました。

教育実習が始まる1ヶ月ほど前に、実習校で事前打ち合わせがありました。主な内容は、実習中の1日の流れ、指導上の注意点や担当する教科、範囲の確認でした。事前打ち合わせで自分が授業を行う単元が分かったので、教科書を読み込む、実際に指導案を作成しました。

2. 実習中の出来事

1週目は授業見学をしました。社会科の授業だけではなく、他教科の授業も見学しました。ただ漠然と見学するだけではなく、授業の進め方、板書、発問や生徒の反応などを観察して自分の授業に取り入れました。また、疑問に思ったことや気になる点があった際は、そのままにせず、質問することを心がけていました。放課後や自宅に帰ってからは、指導案を作成や模擬授業を行い、授業に向けて準備をしました。

2週目以降は、教壇に立ち7クラス、3回分の授業を行いました。初めは、自分が思い描いていた授業とはかけ離れたものでした。しかし、1回の授業が終わるごとに、良かった点と反省点をまとめました。その結果、回数を重ねるごとに良い授業を行うことができました。

3週目の最終日に研究授業を行いました。正直、授業をうまく進めることができなかつたけれど、生徒から面白かったという声を聞いてやりがいを感じました。

授業だけではなく、HRも行いました。私は、授業を行う学年とHRを行う学年が異なっていたため、なかなか生徒との距離を詰める時間がありま

せんでした。自分なりに工夫をして、清掃を一緒にしたり、朝早めに教室に行ったりしました。

3. 実習を通して学んだこと

授業は生徒の考えや発言によって成り立っていることを学びました。いくら完璧な指導案を作成したところで、生徒の反応次第では、授業は思わぬ方向へ進みます。実際、7クラスで授業を行ってみるとどのクラスも全く同じ授業というものはありませんでした。生徒の考えや発言によって授業の進め方は変わっていきます。その中で、自分が進めたい方向にもっていく、臨機応変さが重要だと考えます。臨機応変に授業を行うには、生徒がこう考えるだろうという想定をしなければいけません。考えの引き出しが多ければ多いほど、生徒と対話するような授業が行えると思います。

4. 後輩へ伝えたいこと

教育実習に対して辛そう、大変そうなどのマイナスなイメージを持っている人もいます。実際、指導案を作成したり、教壇に立つのは大変でした。しかし、自分自身、実習を通して成長している実感や生徒から面白い授業だったという声を聴くとやりがいを感じます。授業は上手いかわなくて当たり前です。上手くできなかつたと落ち込みすぎず、どこが反省点なのかを考え、改善していくことが重要だと思います。

また、実習中は基礎的なことを大切にしてください。基礎的なこととは、挨拶をする、ルールを守る、何事にも誠実に取り組むなどの事です。先生方は実習生をよく見ています。このような基礎的なことができるかできないかだけでも、印象は大きく変わります。先生方は一生懸命実習に取り組む姿を見れば、何か困ったときに力を貸してくれます。

私の教育実習

経営学部経営学科 4 年

望月 大叶

1. 実習までの準備

教育実習が始まる半年前に1回目の打ち合わせがありました。そこでは校長先生との顔合わせを行い、自分が希望する教科の希望の提出を行いました。教育実習の2週間前に2回目の打ち合わせがあり、指導教諭との顔合わせとどの授業のどの内容を担当するのかを発表されました。私は2年生のビジネス経済という内容の授業を担当することになりました。しかしその科目は私が在学時に勉強していたものではなかったため、0からの勉強でした。そのためどのように勉強したら良いか、どの教科書を使って勉強をしたらいいのかを指導教諭にすぐに確認をして勉強に取り掛かりました。人に教えるためにはまず自分自身が理解をしていないと始まらない、100のインプットをしてやっと1のアウトプットが可能になる。と教えていただき、教育実習が始まるまでにとにかく教科書を読み、大学の授業も参考にしながら授業づくりに励みました。ただ単に教科書を勉強するだけではなく自分なりに理解、解釈をして小学生でも理解をすることができるような説明を目標に教材研究を行いました。

2. 実習中の苦労

2週間の実習のうち、授業は全部で5回行いました。大学がオンライン授業になってしまい、教壇に立ったことがなかったため最初は苦労しました。板書の仕方や立つ位置も最初はわからなく、何度も指導教諭に指導していただきました。

指導教諭からは「ただ単に教科書の内容を教えるだけでは意味がない」というお話をいただきました。教科書の内容だけであれば読むだけで理解をすることができ、わざわざ教員が授業をする意味がないからです。そのため教員はわかりやすく説明をすることで勉強のやる気を引き出すことや、学ぶことの楽しさを理解してもらうことが授業の目的であるということを改めて実感しました。

授業の準備では事前に様々なプランを考えながら予行練習も行いました。授業前日の夜には一人で教室に残り模擬授業を何度も行いました。何度準備をしても、生徒の書くスピードに合わせることができないことや緊張のあまり伝えたいことを忘れてしまうなどの予想外のアクシデントが多く苦勞をしました。物事にはアクシデントが付き物であるということを学ぶと同時に、準備の大切さを実感しました。授業は一度行うだけで完成することはなく、準備、実践、反省を何度も行い、試行錯誤を繰り返しながらより良い授業にしていこうと指導していただきました。

3. 実習を通して学んだこと

まず教育実習を通して仕事に対する考え方や働くことの意義を理解することができました。実際に朝から晩まで仕事として働き、自分より目上の人との接し方や大学生として外部の人間との付き合い方などを勉強することができました。また社会人として重要な報告、連絡、相談の大切さを実感しました。教員同士だけでなく生徒との意思疎通やコミュニケーションを行い、より良い信頼関係を築いていくことが重要であると学び、教員という仕事だけではなく社会人として大事なことも教育実習を通して学ぶことができました。

さらには教員という仕事の大変さと面白さを学びました。私は実習生だったので教えるのは教科だけでしたが教員の仕事というのはそれだけではありません。生徒の進路の相談、学習のサポート、生徒の相談に応じることなどすべきことは多くありました。ですがそれも全て生徒が社会に出た時に恥ずかしくないように生徒のためを思って指導をするのが教員の仕事であると学びました。実際に実習の現場で見て改めて教員の仕事は奥が深く、教育には終わりが無いのだと実感しました。

教員の仕事の大変さを実感する一方で、生徒ができなかったことをできるようになることや生徒

が人として成長をすることに喜びを感じ、そういった場面において教員という仕事のやりがいを感じることができました。

さい。皆様の実習が実り多きものになるように祈っております。

4. 後輩へ伝えたいこと

私の唯一の心残りは、もっと授業の準備をすべきであったということです。授業を通してもっとわかりやすく伝えることができたのではないかと終わった後に考えることがありました。教材研究には終わりがありませんので、簡単に満足をしてしまうのではなく準備を念入りにして自分の納得のいく授業を行えるようにしておくことが重要だと思います。また教育実習の期間は2週間、もしくは3週間という短い期間です。生徒も教員もマスクで顔が隠れておりなかなか顔と名前を一致させることが難しいので、どの生徒にも積極的に声をかけてたくさんの生徒とコミュニケーションをとることをお勧めします。学校は教員同士、そして生徒との信頼関係があつてこそ成り立ちます。

教育実習では教員になる、ならないに関係なく良い経験になるということは確実に言えます。実際に大学の座学だけでは学ぶことのできない現場の雰囲気や緊張感を肌で感じることができ、そこから多くのことを学べる良い機会であると私は考えます。教育実習中は上手いいかないことや苦勞することもたくさんあると思いますが、学ぶことの方が多くこの経験は必ず自分のためになると思いますので最後まで諦めずに頑張ってみてください。

最後になりますが、この実習は大学の先生、職員の方々、そして実習校の方々が私たちのために時間をかけて準備して下さったことです。その方々に恥じないように、さらにはその方々に期待に応えられるように努力する必要が私たちにはあります。さらに、私たちはあくまでも実習生という立場で臨みます。一人の大人として、礼儀とマナーと感謝の気持ちを持って実習に臨んでください。

後輩の皆様は教材研究や模擬授業の練習、授業の見学など実習までにできる限りの準備をして、悔いのないように最高の実習期間を過ごしてください。

教育実習の経験

国際関係学部国際関係学科 4年

栗山 泰征（クワヤマ タイセイ）

1. 実習までの準備

教育実習開始の3週間前に実習校で打ち合わせをしました。全体で自己紹介を行った後に、教育実習のしおりに沿って実習の日程や注意事項を確認しました。その後、指導教諭とそれぞれが個別で打ち合わせを行い、ここで担当する学年とクラス、授業とその範囲などを教えて頂きました。実習が始まるまでの間は自宅で貸していただいた教科書や資料を参考に教材研究を行いました。教材研究はとにかく大事だと教わっていたため、実習が始まるまでに範囲の半分以上の指導案を形だけでも作りました。3週間の実習の予定をよく把握した上で、入念な教材研究が必要だと思います。

2. 実習中の出来事

実習の1週目は体育祭と授業参観をしました。体育祭は縦割りだったため中々クラスの生徒との距離を縮めるのは難しかったですが、顔を覚えている生徒に積極的に話しかけるようにしました。授業参観は自分が授業をするクラスや評判の良い教師の授業を主に見学することで、授業の雰囲気や一連の流れ、生徒との関わり方などその時々によって注目する視点を変えて効率的に行いました。

2週目から実際に授業を行いました。最初は想像しているような展開にはならず、生徒とのコミュニケーションや時間の使い方に非常に苦労しました。毎回の授業終わりには指導教諭と一対一で反省会を行い、次回の授業では反省点を改善するなどして着々と進歩していきました。授業をやっていく中で、特にコミュニケーション英語ではL, R, W, Sのどの観点のアクティビティを行うかを指導教諭とよく話し合い、私はリスニングを重点にした授業をしました。特に難しかったのは文法の授業です。やはり退屈になってしまい、生徒の集中が続かにくいです。いかに生徒の視点に立って授業ができるか、自分の実体験からの文法の

勉強方法にも触れることが効果的だと思います。

研究授業ではコミュニケーション英語の単元のまとめを扱いました。どのクラスで研究授業を行うかは非常に重要なので前もってよく考えておくべきです。当日は機械のトラブルがあり焦りましたが、なんとか研究授業を終えることができ見学しにきてくださった先生方からは賛否両論の有用的なアドバイスを多く頂きました。

私の場合は研究授業後に複数回授業が残っていたので、特別にSDGsの授業の中からGender Equalityを担当させてもらい、授業を行いました。国際関係学科の強みを活かしたく、英語だけでなく大学で学んでいることも教えたいと実習前から考えていました。男女平等やLGBTについて英語で授業を行うことで、国際問題を絡みあうより実践的な英語の授業をすることができました。最終日の授業アンケートでは、多くの生徒から「ジェンダーについて興味を抱いた」という声や率直な授業の感想および意見を頂きました。

3. 実習を通して学んだこと

今回の教育実習を通して授業は「人と人の関わり」であることを学びました。指導教諭に「生徒は生き物、そして授業も生き物」という言葉を頂きました。同じ授業内容でもAクラスでは上手く行っても、Bクラスでは生徒から同じような反応を貰えないことを実際に経験しました。ここから、同じ授業を全てのクラスで提供するのではなく、より入念な準備と各クラスの生徒の特徴を把握した上で変化に対応可能な適応力を持った授業を展開する必要があるということ学びました。特に自分の欠点として、上記のような適応力やタイムマネジメント力、生徒への明確な指示出しが挙げられます。50分という限られた時間内に授業を遅れなく進めていくのは難しいです。そのために、各回の授業でどこを一番生徒に伝えたいかを明確

にし、そして生徒の反応に合わせて山の登り道と下り道を臨機応変に適応させる力が必要だと学びました。

4. 後輩へ伝えたいこと

伝えたいことは人との関わりを大切にすること、そして目標を持って実習に臨むことです。まず、学校現場はとにかくあらゆる人がいます。そして全て重要な人です。特に実習中は担当のクラスや指導教諭のみならず、担当学年の先生方や同じ教科の先生方、また自分が生徒時代にお世話になった先生方、そして他の実習生などとのコミュニケーションが大事です。互いに支え合い、刺激し合い、教育に対して真剣に考えることができる重要な機会なので多くの人から多くのことを吸収して学ぶべきだと思います。

また、目標を持って臨むことも大切です。実習中が忙しいため、とにかく毎日を無事に終えること精一杯になりがちです。気づけば実習が終わるというような勿体ないことは避けて、実習全体を通して生徒に何を伝えたいのか、指導教諭とどのような関係を築きたいのか、研究授業は何を扱いそしてどんな結果を収めたいのかなど、目標を見失わないようにして欲しいです。そうすればきっと指導教諭や生徒、そして実習生の仲間もその目標に気づいてくれるはずです。失敗と改善を繰り返して有意義な教育実習を迎えて欲しいと思います。

私の教育実習

法学部法律学科 4 年

町田 なの穂

1. 実習までの1週間

実習開始の1週間前に指導教諭との打ち合わせを行った。そこでは、担当するクラスの様子や、授業を行っている範囲、どのあたりの単元を受け持つのかなど、詳しく打ち合わせをする。事前に教材研究などの準備をするにあたって重要な情報となるので、打ち合わせ前に質問事項をまとめておき、分からないことや、許可が必要と思われることはこの打ち合わせである程度解決できるようにすることが望ましいと感じる。

実習までの間は、教材研究をして過ごした。自分が受け持つ予定の範囲の前後を教科書はもちろん、資料集などにも目を通した。分からないところは調べておき、実習が始まってから慌てて勉強しなおすことがないようにした。

また、私は実習中の心構えとして「素直に、誠実に向き合う」と決めておいた。実習が始まるまでは、不安や緊張があり、落ち着かないと思うが、ひとつ自分の中で心構えを決めておくと、気合も入るし、実習に向けて前向きに考えることができるようになると思う。

2. 授業の工夫と生徒の成長

ある日、一人の生徒が私に相談をしてきてくれた。「授業で手を挙げて発言をしたいけど、答えが合っているのか不安で、なかなか手が挙げられない」という内容であった。私は、この質問をされるまで、手を挙げて答える生徒の気持ちは考えずに、授業を作っていたのだと気が付いた。生徒に発言をさせ、授業を作っていくことは大切なことであるが、発言がしやすい環境を作ることも大切であると生徒の質問から気づいたのである。そこから、どう環境づくりをしたら発言がしやすいのかを考えた。私がとった方法は、発表をする前に、隣同士や、4人グループなどで小さい場で意見交換をし、その後、教室全体で意見を発表するという形である。研究授業で実践すると、この質問を

くれた生徒は、最初は迷っていたものの、勇気を出し、手を挙げ、発言をしてくれたのである。とても嬉しい出来事であったし、短期間で成長を感じることができ、教師のやりがいを感じた出来事でもある。生徒目線に立ち、授業にちょっとした工夫をするだけで、生徒の成長を促すことができるのである。

3. 生徒目線に立つこと

実習を通して学んだことは、授業だけでなく、生徒と関わる際には、生徒目線で物事を考えるということである。授業においては、生徒目線で授業を構成することの大切さ、生徒が主体となり、学ぶことのできる環境を作るということにおいて、生徒目線は重要となってくる。普段の生活においても、生徒の目線に立ち考えることは大切である。指導教諭は、生徒一人一人をよく観察し、その生徒に応じた対応というものをしていた。伝え方や、指導の仕方を生徒によって変えていたのが印象に残っている。どう話せば、その生徒にうまく伝わるのかをその生徒自身の目線に立ち、考えることの大切さを学ばせていただいた。

3週間という短い期間において、生徒それぞれにあった対応というものはできなかったが、授業においては生徒目線というところで一番悩み、意識したところでもあるし、普段の生活においても、この生徒はこのような個性があるなどよく観察するきっかけともなった。

4. 基本は真似ること

授業の上達、生徒との関わりにおいて、基本は指導教諭の真似から始めると良いと感じる。私は、指導教諭の授業スタイルを最初の1週間程度で授業参観を通して、見て学び、それを真似ながら指導案を作成し、実際に授業実践をしていた。いきなり指導案を書き始めるのではなく、指導教諭の授業を見て、それに沿って指導案を書くことをお

勧めする。真似ることは悪いことではない。指導教諭の説明の仕方や、資料の提示の仕方等を真似し、実践してみることで、そのタイミングの難しさ、言葉選びの難しさというのを実感できるのである。それを繰り返していくうちに、授業のスキルも徐々に上達していくのではないかと思う。

また、生徒の良いところを毎日探すということを実践してほしい。生徒一人一人をよく知ることもつながるし、良いところを見つけ、伝えることで、よいコミュニケーションにもなる。私の担当したクラスは、毎日いいところ探しという活動をしていた。生徒たちは互いを認め、尊重する姿勢が見についていたようにうかがえた。帰りの会などを担当するようになれば、先生からの話の際に、クラスの良いところを伝えることでいい雰囲気で帰宅してもらうことができ、教室の雰囲気づくりにとってもよい行動だと感じる。

実習中は、失敗もたくさんするし、悩むこともあるけれど、素直に、誠実に向き合っていけば、大きく成長することができる。前向きな気持ちで、実習に臨んでほしい。

【課程基礎データ 資料】

2020課程履修者数

令和2年10月1日現在

【教職課程】

区 分	1年		2年		3年		4年		合計	
	総数	女子	総数	女子	総数	女子	総数	女子	総数	女子
経営学部 経営学科	9	2	10	3	13	4	11	3	43	12
経済学部 経済学科	11	1	14	3	11	1	7	0	43	5
法学部 法律学科	14	4	24	4	14	3	7	0	59	11
国際関係学部 国際関係学科(社会)	3	2	15	7	5	4	1	0	24	13
国際関係学部 国際関係学科(英語)	12	9	9	6	4	1	13	8	38	24
国際関係学部 多文化コミュニケーション学科(社会)	2	1	0	0	1	1	0	0	3	2
国際関係学部 多文化コミュニケーション学科(英語)	1	1	2	2	1	1	1	0	5	4
大学合計	52	20	74	25	49	15	40	11	215	71

【図書館学課程】

区 分	1年		2年		3年		4年		合計	
	総数	女子	総数	女子	総数	女子	総数	女子	総数	女子
経営学部 経営学科	2		2	0	3	0	1	1	8	1
経営学部 ホスピタリティ・マネジメント学科			0	0	0	0	0	0	0	0
経済学部 経済学科	3		1	0	0	0	3	2	7	2
法学部 法律学科	2		0	0	6	6	4	2	12	8
国際関係学部 国際関係学科	1		1	1	2	2	0	0	4	3
国際関係学部 多文化コミュニケーション学科	6		0	0	1	1	1	1	8	2
都市創造学部 都市創造学科	2		0	0	2	1	0	0	4	1
大学合計	16	0	4	1	14	10	9	6	43	17

【社会教育主事課程】

区 分	1年		2年		3年		4年		合計	
	総数	女子	総数	女子	総数	女子	総数	女子	総数	女子
経営学部 経営学科			0	0	0	0	1	0	1	0
経営学部 ホスピタリティ・マネジメント学科			0	0	0	0	0	0	0	0
経済学部 経済学科			0	0	1	0	0	0	1	0
法学部 法律学科	1		0	0	0	0	0	0	1	0
国際関係学部 国際関係学科	1		0	0	0	0	0	0	1	0
国際関係学部 多文化コミュニケーション学科	1		0	0	0	0	0	0	1	0
都市創造学部 都市創造学科	1		0	0	0	0	1	1	2	1
大学合計	4	0	0	0	1	0	2	1	7	1

【2020年度資格取得者数】

【教育職員免許状一括申請授与件数】

学校種	教科	経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	科目等履修生	合計
中学校1種	社会	6	4	4	1	0	15
	英語				12	0	12
高等学校1種	公民	8	7	5	1	0	21
	商業	3				0	3
	英語				12	0	12
合計		17	11	9	26	0	63

【司書教諭資格申請予定者】

経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	科目等履修生	合計
0	0	0	0	0	0

【司書資格取得者】

経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	都市創造学部	科目等履修生	合計
1	3	0	0	0	0	4

【学校司書モデルカリキュラム修得者】

経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	都市創造学部	科目等履修生	合計
0	1	0	0	0	1	2

【社会教育主事課程修了者】 ※社会教育士(0)

経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	都市創造学部	科目等履修生	合計
0	0	0	0	0	0	0

【2020年度介護等体験活動実施状況】

特別支援学校(2日間)

学校名	経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	科目等履修生	合計
都立小金井特別支援学校	9	6	10	7	0	32

社会福祉施設(5日間)

社会福祉施設名	経営学部	経済学部	法学部	国際関係学部	科目等履修生	合計
※下記参照	9	6	10	7	0	32

戸山いつきの杜(1)デイサービスいちばん星(1)中延在宅サービスセンター(1)デイ・ホームたまがわ(2)デイ・ホーム中町(1)南陽園在宅サービスセンター(1)憩いの里 いけぶくろ(1)入谷翔裕園(1)デイホームゆりの木 武蔵村山(1)あすなろみんなの家(2)デイサービスいずみ(1)第二南陽園(1)みどりの郷福楽園(1)ゆとりえ(1)とらいふ武蔵野・デイサービスセンターとらいふ武蔵野(6)フローラ田無(3)世田谷区立千歳台福祉園(1)西水元福祉館(1)江戸川区立みんなの家(1)八王子生活実習所(1)ひなたの道 生活介護(2)のぞみの家(1)

2020年度 教育実習先・実習科目一覧

都道府県	実習校名	実習校住所	教科	
青森県	青森県立木造高等学校	青森県つがる市	公民	
山形県	山辺町立山辺中学校	山形県東村山郡	英語	
福島県	福島県いわき市立中央台北中学校	福島県いわき市	英語	
栃木県	那須塩原市立東那須野中学校	栃木県那須塩原市	社会	*
山梨県	甲府市立甲府商業高等学校	山梨県甲府市	商業	
埼玉県	埼玉県狭山市立入間川中学校	埼玉県狭山市	社会科	
埼玉県	川越市立山田中学校	埼玉県川越市	社会科	*
埼玉県	聖望学園高等学校	埼玉県飯能市	公民(現代社会)	
埼玉県	武南高等学校	埼玉県蕨市	公民(政治経済)	
埼玉県	川口市立川口高等学校	埼玉県川口市	公民(倫理)	
埼玉県	埼玉県立与野高等学校	埼玉県さいたま市	英語	
埼玉県	淑徳与野中学・高等学校	埼玉県さいたま市	英語	*
埼玉県	白岡市立菁莪中学校	埼玉県白岡市	英語科	
千葉県	千葉黎明高等学校	千葉県八街市	商業	
千葉県	東京学館高等学校	千葉県印旛郡	公民	
東京都	東海大学菅生高等学校	東京都あきる野市	公民	
東京都	東海大学菅生高等学校	東京都あきる野市	公民	
東京都	帝京高等学校	東京都板橋区	社会・公民	
東京都	八王子実践高等学校	東京都八王子市	公民	
東京都	目黒日本大学高等学校	東京都目黒区	中学校社会科・高等学校公民科	
東京都	佼成学園中高等学校	東京都杉並区	中学校社会科・高等学校公民科	
東京都	東京都立翔陽高等学校	東京都八王子市	英語	
東京都	稲城市立稲城第六中学校	東京都稲城市	英語	
東京都	東京都立小平南高等学校	東京都小平市	英語	
東京都	東京都立保谷高等学校	東京都西東京市	英語	
神奈川県	横浜市立都田中学校	神奈川県横浜市	社会科	
神奈川県	川崎市立南大師中学校	神奈川県川崎市	英語科	*
新潟県	新潟県立津南中等教育学校	新潟県中魚沼郡	英語	
富山県	富山県立富山いずみ高等学校	富山県富山市	外国語(英語)	
長野県	長野県上田市立真田中学校	長野県上田市	英語	
静岡県	尾道中学校・高等学校	広島県尾道市	公民科	
愛知県	愛知県豊橋市立南陵中学校	愛知県豊橋市	社会	*
滋賀県	光泉カトリック中学校 光泉カトリック高等学校	滋賀県草津市	社会/公民	*
大阪府	大阪商業大学高等学校	大阪府東大阪市	公民科	
広島県	尾道中学校・高等学校	広島県尾道市	公民科	
熊本県	人吉市立第一中学校	熊本県人吉市	社会科	

* 印の実習校については短縮実習

卒業生進路一覧

就職年度	卒業年度	学部	就職先	職名	教科
平成27年度	平27	経営学部	千葉商科大学附属高等学校	非常勤	商業
	平27	経営学部	市川大野高等学校	常勤講師	特別支援
	平27	経営学部	佐久長聖高等学校	非常勤	公民
	平27	経済学部	群馬県立館林高等特別支援学校	非常勤	
	平27	国際関係学部	高知県東洋町立甲浦中学校	非常勤	社会
	平27	国際関係学部	佐賀県立金立特別支援学校	常勤講師	
	平27	国際関係学部	横浜創英中学・高等学校	常勤講師	英語
	平26	経済学部	九州国際大学附属高等学校	常勤講師	社会
	平25	国際関係学部	明秀学園日立高等学校	非常勤	英語
	平23	国際関係学部	東京都立 中・高等学校	専任	英語
	平23	国際関係学部	足利市立坂西中学校	専任	英語
平成28年度	平28	経営学部	サポート教員(柏市)→柏市立光ヶ丘中学校	非常勤	社会
	平28	経営学部	板橋区立板橋第一中学校	専任	特別支援
	平28	法学部	私立米子北高等学校	非常勤	社会
	平28	国際関係学部	那覇市立松島中学校	常勤講師	英語
	平23	国際関係学部	平成国際大学 スポーツ健康科学部	助教	体育(コーチング学)
	平19	国際関係学部	東京都立青梅総合高等学校	常勤講師	英語
平成29年度	平29	経営学部	富山第一高等学校	非常勤	公民
	平29	経営学部	育英高等学校	非常勤	公民
	平29	法学部	名護市立大宮中学校	臨時任用	公民
	平29	国際関係学部	読谷村立読谷中学校	特別支援教育支援員	英語
	平26	経営学部	横浜市立高校	専任	商業
	平26	経営学部	根室高等学校	専任	商業
	平21	国際関係学部	新潟小学校	非常勤	
	平18	法学部	富島高等学校(宮崎県)	常勤	公民

卒業生進路一覧

就職年度	卒業年度	学部	就職先	職名	教科
平成30年度	平30	経営学部	船橋市立船橋特別支援学校	臨時任用	
	平30	経営学部	東京都立農業高等学校(定時制課程)	専任	地理歴史
	平30	経営学部	埼玉県上尾市立東中学校	臨時任用	社会
	平30	経営学部	私立関根学園高等学校	常勤講師	公民
	平30	経済学部	神奈川県立茅ヶ崎養護学校	臨時任用	特別支援
	平30	経済学部	私立山村国際高等学校	非常勤	公民
	平30	経済学部	千葉県習志野市立第二中学校	臨時任用	社会
	平30	法学部	福島県会津若松市立一箕中学校	臨時任用	社会
	平30	国際関係学部	千葉県匝瑳市立第二中学校	常勤講師	英語
	平28	法学部	長崎県立鶴洋高等学校	非常勤	体育
	平27	法学部	埼玉県小学校教員	専任	
	平25	経営学部	東京都小学校教員	専任	
	平24	経済学部	広島県庄原市立東城中学校 (特別支援学級)	臨時任用	
	令和元年度	令1	経営学部	埼玉県富士見市立西中学校	臨時任用
令1		経済学部	東京都墨田区立文花中学校	専任	社会
令1		経済学部	八千代市立大和田中学校	常勤講師	社会
令1		法学部	千葉県立沼南高等学校	臨時任用	公民
令1		法学部	相模原市立弥栄中学校	常勤講師	社会
令1		法学部	浜名市立浜名中学校	臨時任用	社会
令和2年度	令2	経営学部	東海大学菅生高等学校	非常勤	公民、野球部寮監・コーチ
	令2	経営学部	白鷺女子高等学校	専任	公民
	令2	経営学部	山梨県立富士北陵高等学校	常勤講師	商業
	令2	経営学部	入間市立黒須小学校	専任	小学校
	令2	経済学部	市川市立第一中学校	臨時任用	社会
	令2	経済学部	川越市立初雁中学校	臨時任用	社会
	令2	経済学部	尾道中学校・高等学校	期限付き	公民
	令2	法学部	桐生第一高等学校	委託職員	公民、野球部指導、
	令2	法学部	市川市立第七中学校	臨時任用	社会
	令2	国際関係学部	いわき市立湯本第三中学校	臨時任用	英語
	令2	国際関係学部	千葉県立松戸高等学校	臨時任用	英語
	令2	国際関係学部	流山市立南流山小学校	臨時任用	小学校
	令2	国際関係学部	東京都昭島市立清泉中学校	専任	英語

2020 年度 課程科目担当者一覧

役 職	氏 名	主な担当科目
教授（主任）	板垣 文彦	教育心理学、職業指導、他
准教授（主任補佐）	三浦 朋子	教職入門、社会科教育法、他
教授	安形 輝	図書館概論、図書館情報技術論、他
教授	秋月 弘子	法学概論、他
教授	江川美紀夫	経済学概論
教授	奥井 智之	社会学概説
教授	尾上 典子	英米文学Ⅱ（教職）
教授	ターハーフイールト ヒーター	英米文学Ⅰ（教職）、他
教授	千波 玲子	英語科教育法、他
教授	長田 秀一	情報資源組織論、情報資源組織演習Ⅰ、他
教授	永綱 憲悟	政治学概論、他
特任教授	大久保俊輝	特別活動論、生徒・進路指導論、他
准教授	青山 治世	外国史概説、他
准教授	池亀 直子	教職入門、教育原理、他
准教授	今津 敏晃	日本史概説、他
准教授	藤岡 大助	政治学原論
准教授	松林幸一郎	体育科目
講師	東浦 拓郎	体育科目（体育主任）
講師	八谷 舞	外国史概説、他
客員准教授	橋本 一郎	特別支援教育概論
講師	奥山 亜喜子	暮らしのなかの憲法、法学概論（教職）
講師	狩野 真規	地理学概説
講師	櫻井 敏	道德教育の理論と実践
講師	佐藤 玲子	英語科教育法Ⅰ・Ⅱ
講師	菅谷 幸浩	政治学概論（教職）
講師	館 潤二	総合的な学習の時間の指導法
講師	丹 一信	図書館情報資源概論、図書館情報資源特論
講師	利根川樹美子	図書館サービス論、図書館制度・経営論
講師	中島 玲子	情報サービス演習他
講師	中根 伸二	教育相談
講師	中山 美由紀	児童サービス論、読書と豊かな人間性
講師	並木 通男	商業科教育法、商業概説
講師	名和 清隆	宗教学概説
講師	庭井 史絵	学校経営と学校図書館、他
講師	橋爪 大輝	哲学概説
講師	橋本 洋光	教育実習指導、教育方法学
講師	長谷川啓介	社会学概説
講師	平澤 孝一	教育相談
講師	松橋 義樹	生涯学習概論
講師	松村 純子	社会教育特講
講師	元木 靖則	教育課程論
講師	森 晴代	音声学
講師	山田 徹	地誌学概説
講師	山本 剛史	倫理学概説
講師	山本 裕一	社会教育演習、社会教育計画
講師	和田 忍	英語学

課程運営連絡協議会記録

第1回 課程運営連絡協議会

日時：令和元年5月6日（月）12：15～12：55

場所：1号館3階 第5会議室

【審議事項】

1. 令和元年度教育実習巡回視察計画について
2. 社会教育主事課程の届出に伴うカリキュラム変更及び担当者について
3. 担当者変更について（図書館学課程）
4. 担当者の追加について（教職課程）

【報告事項】

1. 課程履修者の状況について
2. 「アジアの風塾」について

第2回 課程運営連絡協議会

日時：令和元年10月7日（月）12時15分～12時54分

場所：1号館3階 第5会議室

【審議事項】

1. 令和2年度カリキュラム及び担当者について
2. 非常勤講師の採用について
3. 課程関連の学則変更について
4. 課程科目履修生の規程の変更について

【報告事項】

1. 後期の教育実習について
2. 後期登録者数について
3. 後期「アジアの風塾」について
4. 教育実習報告会について
5. 事務組織改編に伴う、担当者の変更について
6. 教育実習期間中の就職活動について

第3回 課程運営連絡協議会

日時：令和2年1月20日（月）12時15分～12時50分

場所：1号館3階 第5会議室

【審議事項】

1. 令和2年度カリキュラムについて
2. 新設科目の「科目の趣旨」について
3. 規程集変更案の一部修正について

【報告事項】

1. 課程担当者打ち合わせ会について

2. 社会教育主事課程文科省への届け出について
3. 教育実習成果報告会について
4. 2・3年生合同ガイダンスについて
5. 明星大学プログラム選考状況について
6. 関私教協第5部会の開催について
7. 第4回課程運営連絡協議会（判定会議）について

第4回 課程運営連絡協議会（判定会議）

日時：令和2年2月25日（月）16時00分～16時30分

場所：1号館3階 第3会議室

【審議事項】

1. 各課程の資格取得の判定について
2. 各課程代表者の決定について

【報告事項】

1. 教職課程「外国史概説」担当者について
2. 社会教育主事課程の届出について
3. 課程科目担当者打ち合わせ会の中止について

『亜細亜大学課程教育研究紀要』刊行規程

(目的及び名称)

- 1 課程教育関係科目を担当する教員の研究成果と教育実践を公表し、また、課程学習に関係する諸活動を報告することにより、本学の課程教育の充実に寄与するため、『亜細亜大学課程教育研究紀要』(以下「本誌」という)を刊行する。

(編集委員会)

- 2 本誌を編集・刊行するために必要な事項を審議するため、編集委員会を置く。編集委員は、課程運営連絡協議会の議を経て、課程の専任教員から選出し、編集委員長は互選とする。編集委員の任期は2年とする。ただし、重任を妨げない。

(発行者、刊行回数及び時期)

- 3 本誌の発行者は「亜細亜大学教職課程・図書館学課程・社会教育主事課程」とする。刊行は年1回とし、原則として、9月とする。

(原稿の種類)

- 4 本誌に掲載する原稿は次の通りとする。
 1. 研究論文
 2. 教育実践報告
 3. 研究ノート
 4. 研究資料
 5. 履修生体験記録
 6. 課程活動報告
 7. 課程基礎データ及び資料
 8. その他

(原稿の採否)

- 5 研究論文及び教育実践報告については、編集委員会が選任する査読者の査読報告をもとに、編集委員会が採否を決定する。履修生体験記録は編集委員会が執筆者を選定する。

(投稿資格)

- 6 研究論文、教育実践報告、研究ノートの投稿ができる者は、課程教育関係科目を担当する教員(非常勤講師を含む)及び、その他、編集委員会が適当と認めた者とする。

(投稿規定)

- 7 投稿規定は別に定める。

(原稿料)

- 8 原稿料は支給しない。

(原稿に関する諸権利)

- 9 本誌に掲載した原稿の執筆者は、亜細亜大学に対して、当該原稿に関する著作権、複製権、公衆送信権行使を許諾したものである。

付則 この規定は2013年2月25日より施行する。

- 2 この規定は2018年5月7日より施行する。

『亜細亜大学課程教育研究紀要』投稿規程

(原稿の締め切り)

- 1 投稿原稿は原則として刊行年の5月15日までに編集委員会に提出するものとする。その他の原稿は編集委員会が執筆者に連絡した期日までに提出する。

(校正)

- 6 著者校正は原則として初校のみとする。

(その他)

- 7 その他、編集上必要な事柄は編集委員会で審議して決める。

(原稿の字数・語数)

- 2 研究論文は邦文で2万字程度(英文の場合は4千語程度)、教育実践報告及び研究ノートは邦文で1万字程度(英文の場合は2千語程度)とする。その他の原稿は編集委員会が執筆者に連絡した字数(語数)とする。図表・写真は白黒とし、占有するスペースを字数・語数に換算して調整するものとする。

(超過分の経費請求)

- 3 上記の標準字数(語数)を大幅に超えた場合、超過分の経費を著者に請求することがある。

(英文タイトルなど)

- 4 邦文投稿原稿には英文のタイトルと著者氏名を付けて提出するものとする。また、英文要旨を付けることができる。

(原稿提出方法)

- 5 印刷原稿2部のほか、電子媒体(CD-ROM や USB 等)を提出するものとする。電子媒体は編集終了後返却する。

編集委員

長田 秀一（法学部教授・委員長）

安形 輝（国際関係学部教授）

池亀 直子（国際関係学部准教授）

亜細亜大学課程教育研究紀要 第9号

2022年3月31日 発行

編集者 亜細亜大学課程研究紀要編集委員会
発行者 亜細亜大学教職課程・図書館学課程
・社会教育主事課程
製作者 亜細亜大学課程研究紀要編集委員会

Bulletin of the Teacher Training Course, Asia University

Vol.9, 2021

【Research Note】

A COIL project with Kent State University (KSU) ---Reiko CHIBA1

【Activities Report】

Practice of Librarian (1) ----- Wakana NAGAI4

Practice of Librarian (2) ----- Shigehiro TASHIRO5

Practice of Care work (1) ----- Yuuki SUGAWARA6

Practice of Care work (2) ----- Kaede KONO8

Practice of Care work (3) ----- Airi KOBAYASHI10

Teaching Practice (1) Social Studies ----- Rio YAMAGUCHI12

Teaching Practice (2) Civics ----- Honomi YOSHINAGA14

Teaching Practice (3) Commerce ----- Yamato MOCHIZUKI15

Teaching Practice (4) English ----- Taisei KUWAYAMA17

Teaching Practice (5) Social Studies ----- Nanoho MACHIDA19

【Data on Teacher Programs】21

【Regulation for Publishing and Contribution Rules】29